



# Golden-Sand

---

～書庵 キンノコ堂～

---

Reicy Cactus

---

君は光の中に立ち、その先へと踏み出した。

舞い上がる花びらが君の勇士を祝福し、降りかかる黄金の砂が約束する。

足元に広がる世界の全てが、君の前に深々と頭を垂れるであろうことを。

さあ、未来という海原に向かうがいい。

消え去った道を再び紡ぎ出すのだ。

薄暗い光の中に浮かぶ、柔らかい黄金色の肌。 下からそっと持ち上げると、その体温は手袋の薄いレザーを通してなお、手の平の温度を打ち消す程に冷たい。

見た目は小さいのに、ずしりとした重さがある。

彼女は急に、緊張を感じた。

今日、今夜この場所に来ることを中山亞伽砂（あがさ）はあまり考えないようにしていた。

やらなければならないこと。

いつかは、それもどうせ近いうちに必ず足を向けなければならない場所であったからこそ、気が進まなかった。

わざと考えないように振舞ってきた。

それもついに限界に来てしまった。

一ヶ月間、通勤バッグに放り込んだままにしていた鍵束を取り出し、真鍮の下部に差し込む。微かな抵抗を感じただけで、鍵はいとも簡単に戒めを解いた。

ため息のような小さい音は、まるでその時を待ちわびていたようだ。

内掛け錠から外した南京錠を鍵束毎ポケットに滑り込ませると、右側に引かれるようにコートが沈む。

この重さが言わんとするところは何か。

守り神であった鍵が外された粗末な木戸に手を添えると、ますます持って緊張は高まる。

ペンキの剥げかけたそれを少しばかりの力を入れて向こう側に押しやると、蝶番は軋み音を立て、隣の建物との間の細い道を曝した。

「暗いね」

姉の美希が肩越しに覗き込んだ。

以外と暗い。懐中電灯を持ってくればよかったか。

心中で舌を鳴らす。それでも、背後のアーケードの乏しい光のお陰でおぼろげではあるが、空間の明暗くらいは見分けが付いた。

亞伽砂は、闇の中に踏み出した。

大人の肩幅ほどしかないその狭い通路の突き当たりは倉庫。右手にあるドアが勝手口となる。

「勝手口」といえば聞こえはいいが、実はこの建物の正式な入り口は後にも先にもここしかない。もともと人が生活するようには出来ていない。だから勝手口が玄関であり、店の裏口で

あり、従業員用の入り口も兼ねているのだ。

業務用の、味も素っ気もないアルミサッシのドアの前で亞伽砂は再びコートポケットから鍵束を取り出す。

その後ろで、美希は細長く開いた空を見上げたが、頭上には黒く細長い空があるだけだ。春という名ばかりの空気はまだ寒く、流れてくる風には湿った苔の匂いが混ざっていた。

つやつやの象牙の根付けと幾つもの鍵がまとめられた束を亞伽砂が受け取ったのは、交通事故で重体になった祖父が息を引き取る二日前。

付き添いの叔母が席を立つのを見計らっていたかのように、彼は管に繋がれた手を枕の下に入れ、そして拳をベッドの横に座る亞伽砂に突きつけた。

痩せた腕に絡まる患者名を記入したバンドの白さが、死に際の肌の浅黒さを一層際立たせる。搬送される救急車の中はもちろん治療中でさえも頑固に手放さず、治療にあたった医師や看護師を困らせたと聞いた。

言葉はなかった。

驚きつつも再び突きつけられた拳を包んだ亞伽砂の手に、彼は鍵束を押し付けた。

ずしりとした重さに戸惑いながらも、叔母の気配を感じ取るやいなや亞伽砂は鍵束をバッグに放り込み素知らぬ顔をし、祖父もまたもとのように人工呼吸器に命を任せた。

あの時、祖父は笑っていた。

いつかのように何も言わずただ、じっと亞伽砂を見つめ微笑んでいた。

そこにはまだ死の影は見え、安堵した彼女はすぐに病院をあとにした。

だが祖父には、死の影が見えていたのかもしれない。

二日後に自分の意識がその影に引きずりこまれるのを、どこかで知っていたのだ。

それが店の鍵だと気がついたのは、母だった。

会社で祖父の訃報を聞き、家に帰った亞伽砂は家族の前に例の鍵束を出してみせた。

「家のじゃないわよ」

実家の鍵を取り出し見比べた母は、思い出したように鍵束を手に烏古い根付けを観察する。

「もしかしたら、店の鍵かも」

店はいつも開いていたから、娘である彼女も実際に鍵に触れたのは数えるほどしかない。しかし、根付けの従える鍵の数は当時よりも増えていた。

「一度行きなさい。姉さん達が行くって言い出すだろうから、早めにね」

懐かしそうに象牙の表面を撫でて、そういいながら母は亞伽砂の手に鍵束を返す。

何故、私なのだろうか。

鍵束の重さに対して、アルミのドアは拍子抜けするほどに軽かった。  
しかし亜伽砂は慎重に、ゆっくりとドアを開く。

自分を驚かすものなど何もないと信じながら。

ドアを途中まで開けたところで、待ちかねたように美希が手を伸ばし暗闇に飛び込んだ。  
そして適当に入り口横の壁をまさぐり、電気のスイッチを見つけた。  
三姉弟の長子である彼女は、どこか怖いもの知らずのところがある。

「んー……こんなだったかな」  
足を踏み入れ腰に手を当てた彼女は、独り言のようにつぶやく。  
やや冷めたような口調の、最初の感想。  
それには答えず、姉を迂回して亜伽砂も足を踏み入れた。  
姉が勇敢だからといって、妹が臆病なわけではない。

亜伽砂はより、慎重なのだ。

彼女がまず心配したのが、電気が点くのかどうかもだった。  
祖父の突然の死から一ヶ月。

その間ここには誰も来なかつたのである。昔の記憶、そして現在の商店街の有様からもとても儲かっているとは言いがたいこの店で、一ヶ月もの間商売を休んで電気代をはじめとした公共料金がちゃんと引き落とされるだけの貯えはあったのだろうか？

だが、電気が点いた時点で亜伽砂の心配は杞憂に終わっていた。普通に考えてみても、それくらい余裕はあるはずだ。それに、祖父が親戚中で一番近い場所に住む母のところに、金の無心に来たことは一度もない。

ぐるりと、亜伽砂はその場で首を巡らし室内を確認した。

入り口左の冷蔵庫、流し、コンロ、奥のソファセットに中央に置かれたダイニングテーブル。  
右手の壁には二階に続く階段と、店への引き戸。階段の前にはトイレ。

専ら店の正面から出入りし、ランドセルを置いてすぐに遊びに行ってしまった美希の、この空間に対する記憶が曖昧なのは仕方がない。当時彼女にとって祖父の店は、荷物置き場か無料のコインロッカーといったところだったのだろう。その点、いつも弟の公宣（きみのぶ）と母の迎えを待つ身であった亜伽砂には、ここは我が家とも呼べる親しみと懐かしさがある。

子供には大きすぎる硬い椅子。当時住んでいた狭いアパートには置けなかったソファはお気に入りの場所。飛び跳ねたスプリングはかなりくたびれていて、ビニール製の生地も縫いあわせ箇所が解れている。もともと上等な物でもないし、かれこれ二十年近い年月が流れているのだ。

むしろ綻びがなければおかしいほどだ。

「店に出てみようよ」

ダイニングテーブルに荷物を置き、スプリングコートのポケットに手を入れ寂しげに佇む妹の背なに声をかけて、美希は引き戸を開けた。

数段の階が顔を出す。

店主の席となるカウンター内は階段の下に位置するわずか二畳ほどのスペース。

靴を脱いで手前の簀子から上がるが、階段があるせいで腰をかがめなければならないほど入り口も狭い。

祖父がこの店を開いたのは、亜伽砂が小学校に入学する少し前だと聞いた。彼女が小学校に入り公宣を幼稚園に入れると、母は二人の世話を祖父母とこの店に任せてパート勤めを始めた。

厚みのある、木のL字カウンターの上にも畳にも古本が乱雑に積み上げられている。

カウンターに向かう祖父は本を読みふけり、祖母は孫の世話をする。

娘婿の転勤が決まるまで四年半続いた生活。

孫が去り、祖母が去り、それでも祖父は店を続けた。

自分一人では茶さえも入れることの出来ない人だと決めつけていた祖父が、祖母亡き後にどんな生活をしていたのか、詳しいことは誰も知らない。

入り口に反してカウンターの中は広く、背を伸ばして立つことができた。頭上に伸びる凹凸が、階段の急峻さを物語っている。

店との仕切りを押し開けて、美希は店に出た。

足にかけた大きな祖父のサンダルは、しっかりと先端が指の形に凹んでる。

古紙の匂い。

蘇るあの頃。

転校したての小学校四年生の美希は、古くさいアーケードの通学路を走り店の正面から入るのが常だった。

「ただいま！」と店主席に座る祖父の前に、投げ出すようにランドセルを置いて預けるやいなや、新しい友達が集まる集合場所に駆け戻る。新しい環境での孤立を極端に恐れたのはおそらく、転勤族の父のせいで幼稚園から続いた転校の繰り返しのせいだ。そんな少女に、黄ばんだ小難しい本を見る余裕はない。例え本棚の前で足を止めたとしても、難解な漢字が連なる背表紙を読むことは出来ないだろう。しかし、カウンターに座る祖父以外店の思い出がなにもないとは、いくらなんでも立派すぎると自分でも苦笑いが出る。

こんな素敵な店なのに。

昔ながらの木枠の引き戸。

下から三分の一は木板、真ん中は模様の入ったガラス、ちょうど大人の顎位の高さから上は透明ガラス。

木戸は古ぼけているが、その外にはアルミ製の雨戸が引かれている。雨戸に設えられたポストの切り込み分だけ内側の引き戸を開けておけば、わざわざ外にポストを置かなくてもいい。

初めて目にする場所みたく店内を見渡している間に、床に山を拵えていた郵便物を拾い集め、カウンターの中で検分を始めた妹に、美希は目を移した。

店の鍵が亜伽砂に託されたことに対して、当然ながら親族連中からは不満の声が出ている。

祖母亡き後の家を喪服の黒に染めた祖父の葬式の夜、祖父の思い出と残る遺産を肴に宴は盛り上がる。今日び親戚が集まるイベントといったら結婚式か葬式か。悲しいはずの葬式は、回を重ねる毎にどこか同窓会じみってくる。しかしそれは一親等まで。世代も違えば生活を共にすることもなかった二親等以上の孫ひ孫には所詮御他人事。退屈な親族顔合わせに部屋の隅に避難している亜伽砂のところに酒臭い顔を近づけては、または宴の席に呼びつけては店はどうするのかと問い詰める。その時はのらりくらりと適当に答えて逃げていたが、本当のところ彼女はどうするつもりだろうか。